

歴史の研究に何の価値があるのか。そもそも「学問」は人間にとって価値的なものなのか。私は歴史学の研究を生業としながらも、心の奥底にはこうした疑問がつねに渦巻いていた。そうした中で、三・一一東日本大震災と東電福島第一原発の事故が起こった。原子炉建屋上空に高く舞い上がる爆風の映像と、それでも「安全」「安心」と言いほる原子力研究者のコメントの様子を見ながら、私は学問・研究によって真実が歪められている実態を目の当たりにした。原子力研究の「正しい知識」という名の幻想が木っ端みじんに吹き飛んださまを見て、私は改めて学問における「正しさ」の意味を問いなおさざるを得なかった。

歴史学は客観的な学問であるようで、実のところ研究者の主観が極めて重要な意味を持つ。『歴史とは何か』の著者E・H・カーは、歴史とは歴史家が過去の事実を取捨選択・解釈し叙述することにより生まれるものだとしている。同じ時代・事象を検討対象とする場合でも、史料の取捨選択・解釈により描かれる歴史像が異なるものにな

歴史学における主観性の問いなおし 村上信明

ることは珍しくない。歴史叙述に歴史研究者の主観が反映されないということはあり得ない。

しかし時として、ある歴史的事象の解釈をめぐる、客観性を建前とした「正しさ」が競い合われる。その代表例が日中韓の間での「正しい歴史認識」をめぐる論争であろう。この論争は、相互の「正しさ」の軸が異なるがゆえに、自らの「正しさ」をいかに相手に認めさせるかという形にしかならえない。ここで問い直されるべきは、それぞれの「正しさ」の根底にある「何を正しいと感じるか」という主観的感覚である。戦前日本のアジア侵略を肯定・賛美する人は、いかに客観性を装ったとしても、心の奥底には抑圧的支配に対する諦念と自由への憎悪が渦巻いているものである。

歴史に向き合う時の痛み・悲しみ・怒りといった感覚を無視・軽視した状態で、客観性を隠れ蓑にして一方的な「正しさ」を押しつけ合っても、認識のズレが解消されるとは私には思えない。人間の感覚を大切にする歴史学を志向していきたい。

(むらかみ のぶあき／東洋哲学研究所委嘱研究員)